

片岡良一著作集

第一卷

片岡良一著作集 第一卷

定價二二〇〇円

昭和五十四年八月十五日印刷  
昭和五十四年八月二十五日発行

著 者 片岡良一

発行者 高梨 茂

印刷者 山田 博

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一八―七  
電話（五六―）五九二一―九

振替東京二二三四  
©一九七九 検印廃止

片岡良一著作集  
第一卷

中央公論社

編集 林 達 夫

小田切 秀雄

目次

井原西鶴

序 節

第一章 人としての西鶴

第一節 出生より青年時代まで

第二節 生活の二側面

第三節 性 格

第四節 死とその前後

第二章 芸術家としての生涯の輪廓

第三章 俳諧師としての西鶴

第一節 学習時代とその頃の俳風

第二節 談林派における西鶴の位置

二 四 四 五 六 七 八 九

第三節 得意時代における彼の俳諧的特質

人事趣味と詩的情趣　おかし味　人生觀の片鱗　表現上の技巧と連想の妙味　矢数俳諧の価値と彼の附句法

五九

第四節 浮世草子作者への過渡と晩年の俳諧

六〇

第四章 浮世草子作者としての西鶴

第一節 浮世草子の先蹤と西鶴物の特質

六一

第二節 好色本

六二

好色本の生れ出た必然　彼の描いた好色生活　好色生活の理想境と「好色一代男」「好色二代男」と「色里三所世帯」「好色一代女」と西鶴の女性觀　「好色五人女」と「好色盛衰記」

第三節 「近代艶隠者」の可能と西鶴の虚無思想

一三〇

第四節 最初の転向期における二作

一三六

転向の必然　「男色大鑑」に描かれた同性愛　「本朝二十不孝」と西鶴の教訓

第五節 武家物

一四六

武家物と西鶴　元祿の武士氣質と「武道伝来記」　「武家義理物語」と「新可笑記」　武家物に描かれた女

第六節 雑話集その他

一六三

武家物より雑話集への転向　西鶴の超自然描写　「懷硯」と「大下馬」　雑話集の裁判物「本朝桜陰比事」

### 第七節 町人物

町人物の世界　当代の町人生活と西鶴の見た金　「日本永代蔵」と「本朝町人鑑」　「世間胸算用」に描かれた金の悲喜劇　西鶴の世相描写と「世の人心」に示された最後の転向

### 第八節 遺稿といわゆる西鶴本

西鶴作と信じ得る遺稿　「俗つれづれ」と酒　「置土産」と「名残の友」とに示された晩年の心境　西鶴作に非ざるべき西鶴本

## 第五章 芸術家としての強み弱み

### 第一節 学　殖

### 第二節 芸術家としての態度と芸術観及び小説構成能力

### 第三節 文　章

## 巻　尾

## 西鶴論稿

## 談林派の運動と西鶴

「一代男」の意義と限界

二四五

「一代男」以後の作品の展開

二六〇

「置土産」と「文反古」

二七四

作品の性格・思想・技術

二八六

一 元禄の性格

二八六

二 町人的世界観の反映

二九七

三 諦観の必然

三〇四

四 自然観

三〇四

五 描写力

三〇〇

六 作品の構成と芸術意識

三〇三

七 時代・環境・生活の作品への投影

三〇五

西鶴作品の現代的意義

三五一

附記

三五九

補論

一 西鶴武家物研究

三六三

編集後記

三九三



井  
原  
西  
鶴

## 序 節

### 第一章 人としての西鶴

出生より青年時代まで      生活の二側面      性格  
死とその前後

### 第二章 芸術家としての生涯の輪廓

### 第三章 俳諧師としての西鶴

学習時代とその頃の俳風      談林派における西鶴  
の位置      得意時代における彼の俳諧の特質  
浮世草子作者への過渡と晩年の俳諧

### 第四章 浮世草子作者としての西鶴

浮世草子の先蹤と西鶴物の特質      好色本      「近代艶隠者」の可能性と西鶴の虚無思想      最初の転  
向期における二作      武家物      雑話集その他  
町人物      遺稿といわゆる西鶴本

### 第五章 芸術家としての強み弱み

学殖      芸術家としての態度と芸術観及び小説構  
成能力      文章

そこには放たれた人間の相が、端的に、赤裸々に描き出されている。古伝統の破壊をその第一義とした戸田茂睡の歌論を、国文学史上における近代主義の第一声とするならば、元禄時代の文芸に現れた千紫万紅は、とりもなおさずその近代主義に目醒めた人間の狂飲乱舞の相である。一代の政治的天才徳川家康によって樹立せられた固定政策は、代々の継承者によって厳密に墨守された。一切の流動と飛躍とは武力と権威とによって暗く脅された。しかも伸び行く生の力——元和偃武以来氤氳に氤氳を重

井原西鶴が華かな創作活動をしたのはこういう時代

のことであつた。しかも彼の生涯はこういう時代の華々しさに對して決して相応しくないものではなかつた。むしろ彼は元禄時代が生んだ多くの文人の中の、最も元禄的な、しかも同時に最も偉大な文人の一人であつたのである。彼を評する後世の批評家が、浄瑠璃の近松、俳諧の芭蕉と並べて、元禄文壇三偉人の一人をもつて称するのは、もとより正しい評価であつた。

がしかし、松尾芭蕉が俳諧文学の始祖として、あるいは俳諧道の聖として、偶像的に欣慕せられてゐるのに對して、あるいは近松門左衛門が戯曲作者の先覺として、または人間愛の詩人として、ひたすら後世人の敬愛をほしきままにしているのに對して、彼西鶴に加えられた過去の評価は、何という混沌と紛糾とを極めてゐるのであらう。「芭蕉様のすねを噛りて夕涼み」という一茶の句は、直ちに一般俳人の芭蕉に對する心情であつたと云つてもあえて過言ではあるまい。「近松門左衛門は作者の氏神也……今作者といへる人々、みな近松のいきかたを手本として書繼るものなり。此道を学ぶ輩近松の像を絵書、昼夜これを拝すべし」という西沢一風の言葉は、近松に對する一般の評価として最近は知らず、大体動かす

ことのできない定説であつたらう。ひとり西鶴に對する批評のみは然く一面的決定的なものではなかつた。彼に對する評価にはいつの時代にも極端に相乖離せる明暗の二面があつた。むしろ一般読者よりの喝采と賞讃とに反比例して、彼に与えられた評語の多くは非難のそれであつた。島村抱月が彼を論じて「紛々たるかな西鶴の是非」と長嘆したのも、また無理ならぬことであつたと思ふ。

もとよりそうした褒貶のそれぞれに幾分の眞実が捉えられてゐることは云うを要しない。「張三李四が面門にも無位の真人出入す。張李と孔子と共に是れ人間なれば、張李が一念時に或は聖人が一念と相通じ、相違はざる」とあるに極まれり。左次郎茶目吉時に或は西鶴の一指一髪を見得る事あるに極まれり」という幸田露伴氏の言葉は、云うまでもなく眞実である。ただ同じ露伴氏が、「張三李四野に佇んで孔子を議するも、議せらるゝもの恐らくは是れ孔子にあらずして彼の張三李四が肚裏の一塊物、仮に孔子と呼ぶるゝものならむのみ。左次郎と茶目吉と或は浪に西鶴を崇び、或は放し西鶴を罵るも、共に恐らくは左次郎茶目吉が眼底の幻影の西鶴と名付けらる

るものにして、真の西鶴にはあらざらむ」という言葉の、より多く真実なるには如かない。西鶴の俳諧に傾倒した榎本其角も、これを罵って止まなかった松月庵随流も、好色本作者としての西鶴を手酷しく攻撃した四方郎朱拙も、これに無限の敬愛を感じた柳亭種彦も、奔放破格なる西鶴の文章を浅ましく下れる姿ありと観じた芭蕉も、これに随喜して模倣改竄到らざるなき其蹟一派も、詮ずる所は張三李四の徒、左次郎茶目吉の輩であるにすぎない。彼の無学と文盲とを軽蔑した都の錦や滝沢馬琴、ないしはこの人国学に秀いでと彼の学殖を称揚した「俳家奇人談」の著者のごときは、西鶴にとってむしろ縁なき衆生であつたらう。

けれども翻ってこれを西鶴の側より観るに、その生前の幾十年と歿後の幾百年とを通じて、あらゆる毀誉と褒貶との波間に漂いつつあるということは、一面誇るべきこととなければならなかった。芥川龍之介氏も云っているように、芸術の鑑賞は芸術家自身とそれを鑑賞する者との協力である。鑑賞家は云わば一つの作品を課題として彼自身の創作を試るのであるにすぎない。したがっていかなる時代にも色々な意味をもって批判され検討

される作品なり作家なりには、たとえその批判評価が毀譽褒貶のいずれであるにもせよ、必ず種々の鑑賞を可能にする特色が具わっているのだからならぬ。西鶴に対する同時代者ないし後世よりの批判が以上のごとく紛雜を極めているということは、かくて自ら西鶴自身の偉大さと複雑さとを云うべき間接の証左となるのでなければならぬ。近頃になってさえ、例えば「西鶴の新研究」における鈴木敏也氏、「国文学に現れたる国民思想の研究」における津田左右吉氏等のごときは、彼の芸術家としての根本的態度を批判して、元禄の昔四方郎朱拙が「一生を夢裏に迎れる浅間しきもの」と断じたのと、ある程度まで似通った觀察を下しているのに対して、「西鶴是非」の論における渡辺乙羽氏は、むしろ彼を補教的文学神聖論に立脚した真摯なる勸懲者流と目しており、露伴、抱月、田山花袋氏等が彼を目して写実派ないし自然派的の作家と仰げば、より新しき時代は芸術派的の技巧家を彼のうちに見出そうとしている。

佐藤春夫 …… 一体日本の小説は淡い。

加藤武雄 随筆の延長といつたやうなところがありま  
すね。一体日本の短篇小説は随筆から発達したんぢ

やないかな。

菊池 寛 そんなことはない。西鶴なんかちゃんとしたプロットを立て、書いてあるよ。ちゃんと事件を書いてある。

佐藤春夫 然しデイトイルでは見聞記を集めて、云ひ得べくんばその排列に小説的構想がある。さういふところは偉いんだが。

久米正雄 計画的なところはあるよ。

菊池 寛 西鶴はちゃんと小説的な事件を取扱つてゐる。見聞記ぢやない。

久米正雄 小説を書くアレنجメントはしてゐるね。

(大正十二年七月号「新潮」)

こういう所に、われわれは西鶴の複雑さが自ずと反映されているのであることを知らなければならない。己が死灰の裡より永久に蘇るという不死鳥にも似て、各時代ごとに新しき面貌をもって蘇らされる西鶴の偉大さと複雑さ——その偉大さと複雑さとに、できるだけ細かく触れて行くことが、取も直さずこの小研究の主要な題目なのである。私は彼に対する先人の評価の跡と、私自身の覚束ない鑑賞力によつて、とにもかくにも彼西鶴の為人

と、その作品とに打つかつて行つて見ようと思う。いわゆる眼底における西鶴の幻影以外に、彼の真実に味到することができれば幸である。できなければ——私は彼の生涯と作品とを材料として、自分自身の創作をものすることに全力を出しきるだけで満足しようと思う。

## 第一章 人としての西鶴

### 第一節 出生より青年時代まで

西鶴は寛永十九年浪華に生れた、というのが今日の通説である。が、寛永十九年生れというのも、出生地の浪華というのも、必ずしも確定的のものではない。彼と親しかった榎本其角の「句兄弟」に西鶴は難波江に生れ云云の言葉があり、彼の祖父西督道方が大阪で死んでいるのみならず、「俳諧団袋」には西鶴自ら故郷難波という

言葉を漏らしているのであってみれば、出生地の浪華というのは動かぬ所と思うけれども、例えば木崎愛吉氏のごとくなおこの点に疑いを懷いていられる人もある。が、その疑いは影が薄い。彼の性格に絡んでいた濃厚な大阪人臭味から考えても、やはり彼は父祖の代から大阪に住んでいた生粋の大阪人であつたろうと思われる。元禄六年に五十二歳をもって歿したという所から逆算しての寛永十九年生れというのも、また大体は首肯できる所であるけれども、彼が菩提寺誓願寺の過去帳には、その歿年を五十三歳とあるというから、恐らくそれを記録の誤りであろうと思うにしたところでお幾分の疑いは残る。同時代者近松に辞世として伝えられている歌が二首あることなどによって正しく知られるとおり、当時の人々の辞世が必ずしも死に最も近い時の作というのではなく、かなり前から用意されていたものらしいことなどが、「浮世の月見過しにけり末二年」の句をも、そのまま彼の歿年を語るものと信ずるには、幾分の躊躇を感じさせないこともないのである。まして彼の著「男色大鑑」に、「見聞覚知の四つの二年まで諸国をたづね」て得た材料を書綴るという意味の言葉があったのを、単に「大鑑」

のみならず、彼の浮世草子全般に通ずる言葉ではなかったかと思えば、彼の処女作「一代男」の世に出た天和二年が、四十一歳の時になり、したがってますます誓願寺の過去帳を無視し得ないことになってくる。

一体元禄時代の学者とか文人とかいうものの伝記はまだ十分に知られていないものが多いが、その中でも西鶴のなどはことに曖昧と混沌とのうちに置かれている。彼の生涯の伝記的事実として確実に伝えられているものは、僅かに彼が大阪の鎗屋町に住んでいたということだけである。しかもそれさえ父祖伝来の家であるのか、俳諧師としての彼が後年自ら選んだ住居であつたのかは分らない。その生涯が判然しないだけ、余計に彼の一生が夢の浮世に優遊自適した一種の韜晦者流らしい浪漫的な雰囲気包まれているような氣もされて、多少の興味を覚えないではないけれども、しかも彼の伝記が確実に伝えられていたら、在来の臆説とは随分異つた形のものが、彼の人格なり生活なりに見出されはしまいかと思うと、やはり少々物足りない。

彼の家系も父母の名もまだ知られていない。祖父の西誉道方という人は彼が二十四歳の五月十二日に大阪で死